



りがたさを忘れてのことかもしれません。

辻 私にとって湯河原は『なりたい私になれる町』です。海が好きだと素直に表現できる自分があるし、出会った人が温かい。私もこんなふうになりたいと思える人がたくさんいるんです。

町長 湯河原に来るきっかけは何だったのですか。

辻 最初に湯河原に来たのは、おばあちゃんの引越しの手伝いでした。電車を降りた瞬間に、体が“好きだな”と感じて、思わず立ち止まってしまいました。初めて吉浜海岸を散歩したときの感動は忘れられません。吉浜の海はいろいろな表情に会うことができ、新しい表情を探すことで新しいアイデアが生まれるんです。今までいろんな海を見てきましたが、吉浜だけが特別な感じがする。何か大切なものが残っている感じがします。この海はサーファー文化が根付いていて、優秀なライフセーバーがたくさんいて、とても健康的な明るい海だということがすごくうれしいですね。そして、海も人間も、新参者の私をすんなりと受け入れてくれました。

町長 昔から母が海の家を営んでいて、小学校の夏休みはいつも海にいました。吉浜の海や人間が好きだと聞くとうれしいです。辻さんは湯河原にずっと住んでいる人が忘れていた大切なものを思い出させてくれますね。

松井 日常を当たり前で過ごしていて、そのありがたみを忘れがちなのかもしれません。私は観光学を学んでいるおかげで、今まで知らなかった湯河原に出会うことができているのですが、自分だけでなく、皆さんにも自分の町を知るきっかけを作れないかと、今は研究しているところです。

町長 そのとおりですね。例えば、有名なお祭りに

は人が集まりますが、それは地元の人たちがそのお祭りを大切にしている、その人たちの姿に惹かれて集まる部分もあるでしょう。地元の人たちのこだわりがあったり、家族の歴史があったり、つながりがあったりと、その土地に住む人が、自分の町に興味を持つことが大切です。

◆音楽から考える湯河原

町長 辻さんのCDを聞かせてもらいましたが、私のような年代にも聞きやすく、特に『Beach Girl』という曲を聴くとほっとしますね。

辻 あの曲は私の湯河原ライフそのものです。歌詞にもあるように、私にとって海は一番良い『深呼吸』ができる場所。それは波の寄せて返す動きと、人間の呼吸に共通する部分があるからかもしれません。

松井 私はプロモーションビデオも見せてもらいました。海などの湯河原の風景がたくさん映っていて、辻さんのアクティブな姿も見られますよね。

辻 プロモーションビデオと言っても手作りで、カメラマンは母。自分のパソコンで編集しました。湯河原の町を自転車で巡ったり、海に入ったりしています。あるファンの人がビデオのロケ地巡りをして、その場所を一生懸命探してくれたことがあって、それはとてもうれしかったです。

松井 それはまさに観光につながる部分ですね。最近ではドラマのロケ地巡りもありますからね。

辻 以前は、湯河原は都心から遠いイメージがありました。ずっと遠い温泉街というイメージ。でも実際に来てみてそんなことないですね。

松井 数字でみても東京から電車で90分。距離でも90kmです。『100』の大台を切っていることを皆さんに実感していただければと思います。

◆これからの湯河原

松井 伝統や文化などの湯河原の良さや、基幹産業である観光というものを守っていききたいし、長く続いて欲しい。それを担う人材の確保が課題ですね。観光に対する人材教育を学校教育に取り入れれば、20年後、30年後を担う人材が育つでしょう。

町長 湯河原では6月になると蜚が飛び交いますが、実は小学生が幼虫を放流しています。20年、30年先にも、蜚が飛び交う環境が続けば、放流をした子どもたちは、自然とその環境を大切にするでしょう。思い出の中で、自信を持って湯河原の良さを感じられることが重要です。

松井 そういった参加型の教育が、もっと総合的学習の時間などに取り入れてもらえるといいですね。

辻 私は湯河原にはあまり変わって欲しくありません。奥湯河原のあの風情はかけがえがないですし、海も湘南のようになって欲しいとは思わない。今の